

図工のみかた

図工の先生のそのまわり

MIKATA NO MIKATA

START!

今号の図工のみかた、辻先生をかたちづくるもの。辻先生が新しい世界へ向かうきっかけとなった、大切なもの、バイブルなどを教えてもらいました。

図工のみかたのみかた

『ごあいさつ』
高田渡 キングレコード



高校生のときに深夜ラジオで高田渡の曲を聴き、「下手でも歌いたいことを自分の言葉で歌っていいんだ」と気づく。音楽が自分に戻ってくる。

下手でも歌う、それもアリか！



『漫画家残酷物語(全)』
永島慎二(著) 朝日ソノラマ刊

漫画で私小説、それもアリか！

小学生のときに貸本屋で『漫画家残酷物語』に出会う。初めて人間の自意識に触れた表現を目にして、「こういう世界があるんだ」と衝撃を受ける。サブカルに目覚める。

小学校の合唱コンクール練習の最中、先生に「君は帰っていいよ」と言われ傷つく。それから高校まで音楽の記憶がぼっかり抜け落ちる。

大学時代。受験勉強のおかげでデッサンがうまくなったものの、大学で師事した先生が“もの派”でカルチャーショック。「こういうものもあるんだ」と悟り、自身の作品づくりもそこへ向かう。(p.2-7の写真は1981年の作品)

モノを置くだけ、それもアリか！

喫茶店「珈夢居」に通い始める。40年経つ今でも居心地のよい書斎のような場所。ポートレートもこちらで撮影。

大学の研究生時代に結婚。妻の両親への挨拶のとき、「君は何になるんだね」と問われ、思わず「教師です」と言ってしまう。

教師になるのも...アリか！

『子どもの絵の発達過程』
辻政博(著) 日本文教出版



子どもはなぜ絵を描くのか
子どもの絵を理解したい人のための
シンプルで基礎的な理論書

現場での経験を外側から見つめ直すため、教員をしながら大学院に通う。そこでの研究を一冊の本にまとめる。

『素材に出あった子供たち』
東京都図画工作研究会(著) 文化書房博文社刊



採用試験に受かり、墨田区の小学校に赴任。同区図工部会の先輩たちの独創的な発想と活動に「それがいいのか!」と刺激を受ける。そのころ発行された都図研の『素材に出あった子供たち』を見て、造形遊びの面白さを確信する。

ワークショップ、それもアリか！

学習指導要領 資質・能力の三つの柱

学びに向かう力、人間性等ってなんだ?①



きっかけ (p.02)

主体的に学習に取り組む態度

みんなのよさ (p.07)

多様性を尊重する態度

子どもは、学ぶことに興味を向け取り組んでいく中で、新たな学びに向かったり、学びを人生や社会に生かそうとしたりする力を高めていくことができます。今号は入り口についてのお話でした。「主体的に!」と言うだけでは、子どもの主体性は引き出せません。自分で感じるからこそ、子どもたちは主体的に学習に取り組み、自分の表現を見つけることができます。そして、自分の表現だからこそ、自他のよさを見つけ、多様性を尊重することができるようになるのではないのでしょうか。

「学びに向かう力、人間性等」を育むための、はじめの一歩、それが自分で感じることなのです。

- ・主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向かう力や、自己の感情や行動を統制する力、よりよい生活や人間関係を自主的に形成する態度等(中略) 自分の思考や行動を客観的に把握し認識する、いわゆる「メタ認知」に関わる力を含むもの
- ・多様性を尊重する態度や互いのよさを生かして協働する力、持続可能な社会づくりに向けた態度、リーダーシップやチームワーク、感性、優しさや思いやりなどの人間性等に関するもの

(平成29年6月 小学校学習指導要領解説総則編より)

図画工作の目標(3)

つくります喜びを味わうとともに、感性を育み、楽しく豊かな生活を創造しようとする態度を養い、豊かな情操を培う。
(平成29年3月 小学校学習指導要領より)

表紙『おもいでを かたちに』(2年生)

思い出を粘土で立体に表す題材。うれしかったのはどんなときかな、楽しかったことは誰と一緒にだったかな。思い出しながら粘土に触れ、表したいものを見つけていく。思い出が表現のきっかけとなり、きつこの瞬間も、素敵な思い出をつくるきっかけになっていく。
(日本文教出版 すがこさく 1・2年 p.28-29)

クリエイティブディレクター：池田晶紀(ゆかい)

アートディレクター：畑ユリエ

フォトグラファー：池田晶紀、川瀬一絵、伊藤萌(ゆかい)

イラストレーション：山根諒子(ゆかい)

図工のみかた 02号

日文教育資料【図画工作】

平成29年(2017年)11月30日発行

編集・発行人 佐々木秀樹

発行所 日本文教出版株式会社

〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5

TEL:06-6692-1261

本書の無断転載・複製を禁じます。

CD33373

日本文教出版 株式会社 http://www.nichibun-g.co.jp/

大阪本社 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL:06-6692-1261 FAX:06-6606-5171

東京本社 〒165-0026 東京都中野区新井1-2-16
TEL:03-3389-4611 FAX:03-3389-4618

九州支社 〒810-0022 福岡市中央区薬院3-11-14
TEL:092-531-7696 FAX:092-521-3938

東海支社 〒461-0004 名古屋市中区葵1-13-18 7F-B
TEL:052-979-7260 FAX:052-979-7261

北海道出張所 〒001-0909 札幌市北区新琴似9-12-11
TEL:011-764-1201 FAX:011-764-0690

INTERVIEW

辻政博

(帝京大学准教授)

学習指導要領

「学びに向かう力、人間性等ってなんだ?①」

本資料は、「教科書発行者行動規範」に則り、配布を許可されているものです。

日文の実践事例、教科情報

詳しくはWebへ!

日文

検索

未来をになう子どもたちへ

日本文教出版



語り手

辻 政博

(帝京大学准教授)

図工の時間、

かかずにじっとしている子どもがいます。

もっとやりたいと声を上げる子どもがいます。

子どもが興味をもって「やりたい！」と思うとき、

「次はこうしたい！」と

新たな表現へと向かっていくとき、

子どもは何を

感じているのでしょうか。

学習指導要領のキーワードと、

図工の見方について、図工の味方、

辻政博先生に聞きました。

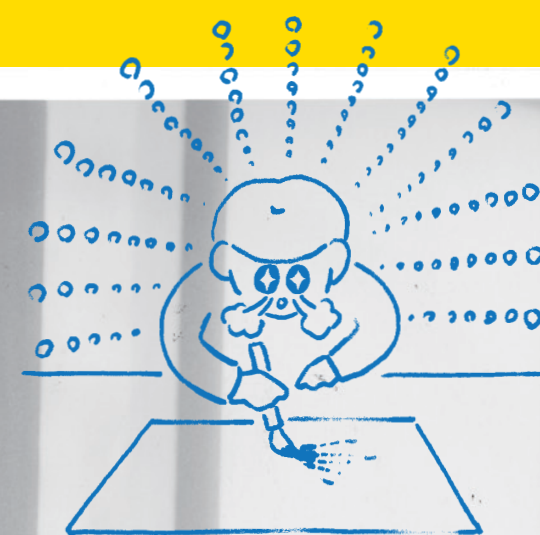
表現への「きっかけ」

は人それぞれ

図工の時間、なかなか表現を始められない子どももっていますよね。ぼくの最初の赴任校に、全然絵をかかない5年生の子がいました。あるとき、和紙を濡らしてから、墨でかく題材をしたんです。そしてその子は和紙にまず点を打った。するとにじむんです、ふわーっと。それからまた点を打って。それをずーっと繰り返して、最後に動物をかくて完成させたんです。その子の世界が表現されたすごく素敵な絵でした。それまでの題材はその子に届いていなかったけど、このとき、点を打ったときの「ふわーっ」というにじみを面白いと感じて、表現に対するエンジンがかかったんじゃないかな。

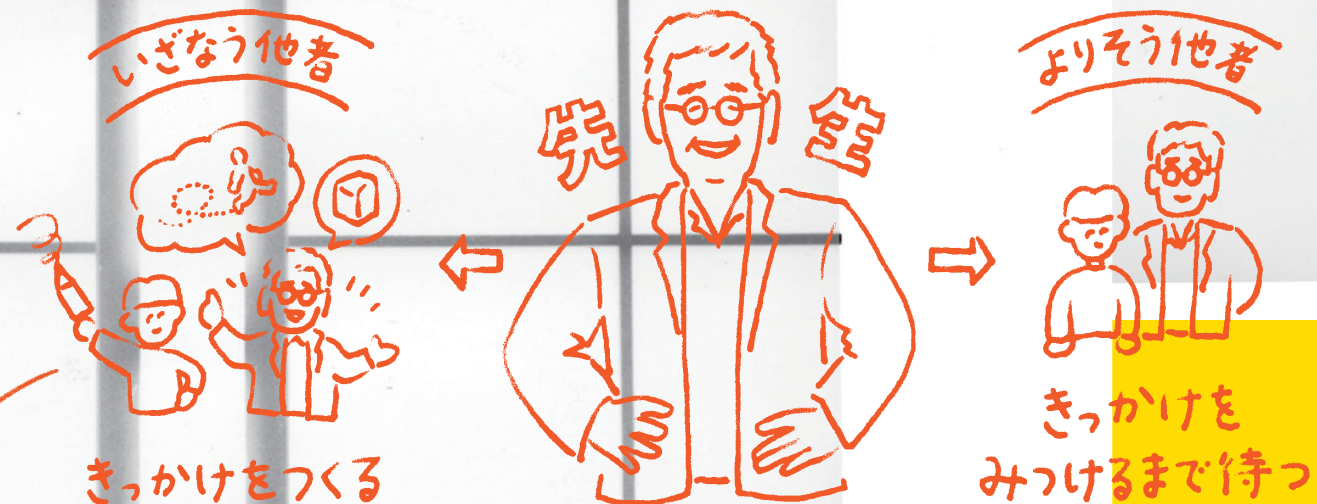
別の学校にもかかない子がいたけど、造形遊びはしてたんです、木を並べるとか、色塗り遊びとか。それを繰り返していたら、いつの間にか自分で絵をかくようになってた。そこまでに半年。それくらいかかって、焦る必要はないと思います。だって、「きっかけ」になることはそれぞれ違うんですから。

「子どもは息をしていること自体が表現だ」と言った先輩の先生がいました。つまり、子どもは、生活とか感情とか、様々なものが織り合わさった存在で、表現する前にすでに意味ある存在なんです。だから、子どもは一人ひとり違うものであり、きっかけもそれぞれ違うと認めることから授業は出発します。図工の時間に先生は、子どものそばにいる「身近な他者」なんです。一人ひとりを認めてあげられる、待ってあげられる、大切な存在なんです。そういう存在が誰もいないと絶望ですよ。ぜひ、子どものそばにいて、子どもの味方になってあげてください。



つじまざひろ
1954年、東京都生まれ。図工専科教員として30年間勤務、都図研会長を経て、現在帝京大学教育学部初等教育学科准教授。NHK Eテレ「キミなら何をつくる?」の制作アドバイザー、NPO法人 市民の芸術活動推進委員会理事などを担当し、日本文教出版小学校図画工作教科書の代表著者の一人として美術教育の発展に努める。

自分で感じる「きっかけ」



子どもって、休み時間に遊んでいるときはすごくダイナミックですよ。自分がしたいことをしているから。でも、授業になると、そのエネルギーが全然出ていないことがある。ぼくの言ったことをただコピーしているだけというか、絵を「かいている」じゃなくて、「かかされている」みたいだと、教員になりたての頃に感じたことがありました。

図工って、自分で感じて、試して、表すことが大切だと思うんです。「自分で感じる」ことから始めれば、エネルギーも引き出せるんじゃないかと考えて、研究授業で「体育館を歩く」という題材をしました。まずはただ歩く。歩くことで子どもに空間を感じ取ってもらう。それから細長く切った画用紙で歩いた跡をつなげてみる。歩いた跡が目に見えるようになる。それを天井から吊るしたロープで釣り上げると、平べったいものが空中にワーって広がっていくのがすごく、みんなでオーって感じになって。で、すぐに壊しておしまい。子どもが自分で感じ取る時間をつくってあげたかった。

例えば粘土を使う題材でも、まず教室へとみんなで大きな粘土を運ぶところから始めるって題材が本で紹介されていたんですが、子どもは粘土を運んで、体でその重さを実感することも楽しい。これも自分で感じる時間になっている。

自分で感じる事が表現への「きっかけ」であり、先生は「きっかけ」のきっかけを与えられる存在です。子どもを自分で表す世界へいざなってあげられる存在です。きっかけを与えてくれる他者、違う世界へいざなってくれる他者がいるから、人は成長できるんだと思います。

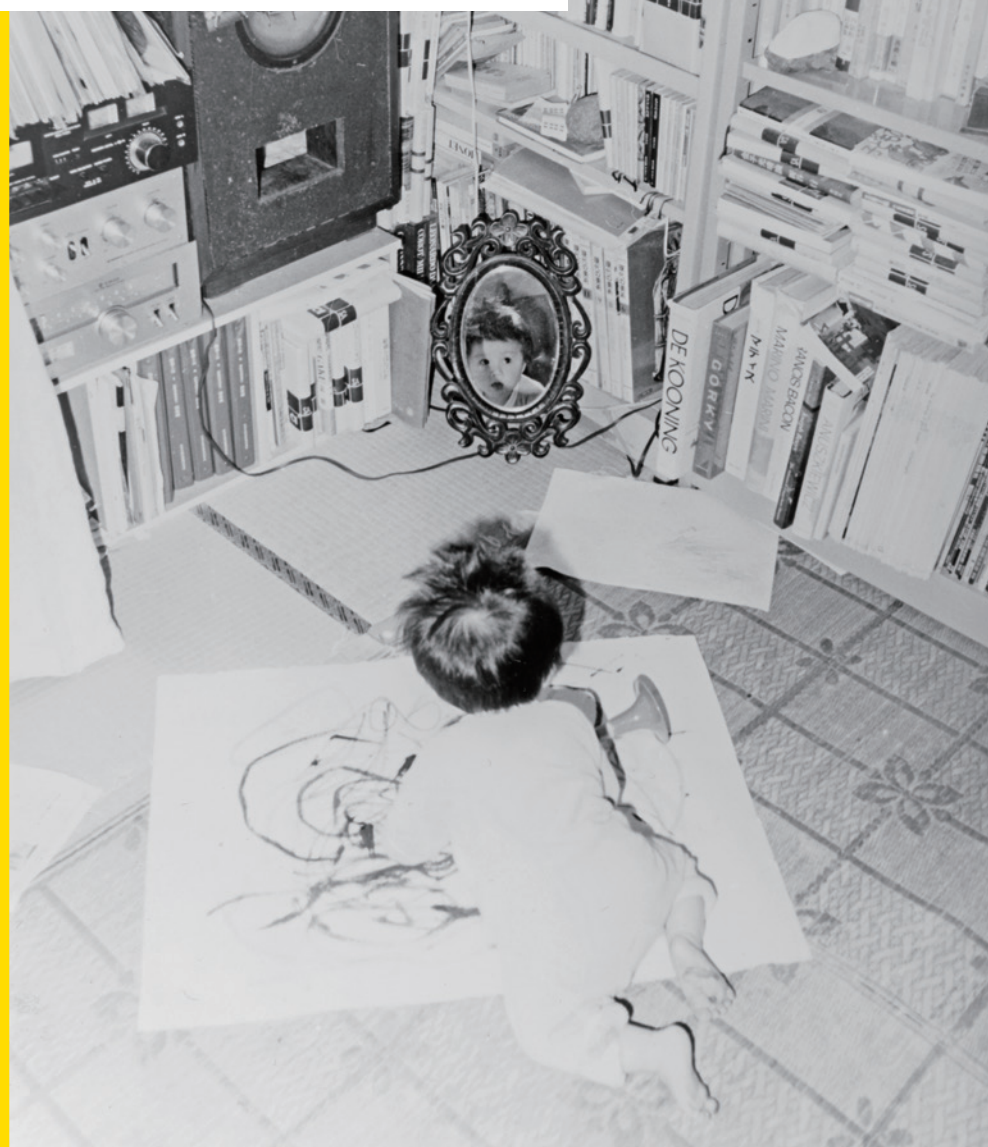


自分で表現するから、みんなのよさが見える

今は大学で教えていますが、図工が嫌いという学生が多いんです。下手だから、苦手だからって。図工って言葉で説明しても伝わりにくいことがあるので、必ず自分の身体感覚を働かせて経験していくということを授業で取り入れています。実行して表現の面白さを実感してもらうという。それで、色水をつくるとか手でかくとか、造形遊びをやっています。

自分で感じて、自由に表現すると、同じものってできない。同じ色水でも、ある学生はグラデーションみたいにきれいな色をつくって並べるけど、別の学生は暗い色ばかりのコップを積んでいるし、また別の学生は水をこぼして表現している。だから授業の後半に鑑賞してみると多様性に気づくん。他者との違いがよくわかって、違いがあるからこそ自分の輪郭がはっきりしてくる。自分の表現したこと、表現したいことが見つかっていく。それが喜びになるんです。自分で感じたことが表現できるっていう喜び。そうして段々心が解けていくという、「けっこう図工って面白いな、もっとやりたいな」ってなっていく。

図工の授業は「先生がいて、教材をつくって、それを子どもがコピーする」という直線的なモデルじゃないんです。図工って、自分で感じて表すことだから。お手本はなくて、標準は自分の中にある。だから、他者との比較で優劣を感じるんじゃなくて、自分と他者のよさや違いを感じられる。そういう多様性を感じることをの教科なんです。





『にぎにぎ ねん土』

ねん土をにぎってできた形。この形をきっかけに、
表したいものを見つけていく。思い付いた形にする
ために、ねん土をつまんだりのぼしたりすれば、
それがまた、次の発想のきっかけになっていく。

(日本文教出版 ずがこうさく 1・2下 p.12-13)



きっかけをつかむ。

手でねん土に触れたときの冷たさや、
指がめりこんでいく感覚、
形が変わっていくこと、
できた形、
どれもが、表現への
「きっかけ」になります。
「できた！」のその前には、
その子の「きっかけ」があります。